

# 太陽の傷

2006(平成18)年10月22日鑑賞(ホクテンザ1)



監督＝三池崇史／出演＝哀川翔／蛭川みほ／佐々木麻緒／佐藤藍子／森本慧／吉岡美穂／勝野洋／本宮泰風／平泉成／夏山千景／富浦智嗣／宅麻伸／風間トオル（シネマパラダイス配給／2006年日本映画／117分）

## 第2章

発想の面白さで見せる

……少年犯罪が多発し凶悪化している今、「少年法」の見直しと犯罪被害者への配慮が求められていることは明らか。そんな議論をリードしていく格好の映画が生まれた！ 愛する一人娘を殺され、妻も自殺に追い込まれた主人公が、1年8カ月で加害少年が仮退院したことを知った時の気持は……？ 一介のサラリーマンがホントにここまで加害少年に迫っていくことができるのかという疑問はあるものの、論点整理は十分で、法科大学院の教材としても最適！

### これは見ごたえありそう……三池崇史監督作品！

三池崇史監督は注目される若手(?)監督の1人だが、私はその代表作『岸和田少年愚連隊 血煙り純情篇』(97年)を観ていない。そして、『IZO』(04年)も『妖怪大戦争』(05年)も私にはダメ作品だったし、9月9日に観た『46億年の恋』(06年)も私の興味を引かなかった。

しかしこの映画のテーマは、15歳の少年の手によって一人娘を殺されたうえ、妻も自殺に追い込まれた主人公が、そんな過酷な現実といかに向き合い、かつ「少年法」によって法的に保護され、わずか1年8カ月後に「仮退院」してきた少年とどのように対峙するのか、というきわめて今日的かつ深刻なもの。

問題提起の鋭さに定評のある三池崇史監督のこと、これは見ごたえありそう……。

## コトの発端は？ やはり見て見ぬふりがベスト……？

妻陽子（蜷川みほ）と一人娘彩乃（佐々木麻緒）と一緒に郊外のマンションで暮らしている主人公片山敏樹（哀川翔）は、建築設計会社につとめる平凡なサラリーマン。駅から自宅までは自転車で通う毎日だ。そんな片山が自宅への帰り道、数名の不良少年グループが浮浪者に暴行を加えている姿を発見。当初は見て見ぬふりをし、傍観者を決め込もうとした片山だったが、やはり気になり、自転車を止めたのがコトの発端。

私にはとてもできないが、多分片山は腕に覚えがあったのだろう。止めに入った片山に対して、少年たちはいきなり殴る蹴るの暴行を加えてきたが、片山は見事な技でそれに反撃。しかし、そこで首謀者らしい不気味な少年神木彰（森本慧）がナイフを抜いて向かってきたから大変。

かろうじてそれをかわしナイフを取りあげ、神木の上に馬乗りになってなお反撃しているところに、やっと警察官が……。

当然、浮浪者からは「ありがとう」と感謝され、警察官も「ごくろうさま」と慰労の声をかけてくるだろうと思っていると、警察官は、「少年相手にあれ以上やれば、過剰防衛で傷害事件になるかも」と警告される始末……。これでは誰でも「見て見ぬふり」をするのがベストと思うのは当然……。

せっかくパパの誕生日を楽しみにして、ケーキを買って待っていてくれた妻や娘の期待を裏切ってまで、社会貢献したのに……。

## ひどい逆恨みのターゲットに……

翌日からも片山には日常どおりのサラリーマン生活が待っていたが、会社からの帰り道、コンビニに寄って雑誌を見ていると、何かヘンな視線が……。それはどうもあの不気味な少年の視線だと気づいた片山は、妻にも用心するように声をかけたが、神木の逆恨みは片山の想像をはるかに超えるものだった……。

ある日、彩乃を連れて友人と一緒に食事をしていた陽子は、一瞬のスキに彩乃がいなくなったのに気づき、真っ青になって探し回ったが見つからない。そんな時、彩乃と手をつないで歩いていたのが、相変わらず無表情な神木。その数時間

後に発見されたのは、無惨な死体となった彩乃の姿だった……。

幸いにも（？）、彩乃の手を引いて歩いていた神木の姿が目撃されていたため、すぐに神木は逮捕されたが、その後を追って突っかかっていこうする片山を押し止めたのは、もちろん警察官。そして、片山を見てニヤリと不気味に笑う神木……。こんなひどい逆恨みのターゲットにされる可能性があるから、戦後61年を経た今の日本社会が、「何ゴトにも我関せず」「触らぬ神に祟りなし」という風潮になってしまったのはむしろ当然……。

### さらなる悲劇が……

無惨にも愛する一人娘が15歳の少年の手によって殺されても、その少年審判手続は「少年法」に則って粛々と進められるだけで、被害者の両親はそれに対しては基本的にノータッチ。加害少年に直接問いかけることすらできないのが現状だ。そのうえ、マスコミは少年に同情的で、犯行に走った1つの背景に片山から暴行を受けていた事実があるなどと、興味本位で勝手な記事を……。そして、警察もマスコミ報道にはノータッチと突き放すだけ……。

娘を失った悲しみのうえに、人々から好奇の目でジロジロと見られる日々が続く中、片山もほとんど限界となり、このまちを出ていこうと考えていた矢先、突然発生したのが、妻陽子の飛び降り自殺。こんな失意の中、片山は不動産屋を営む先輩の田口邦男（勝野洋）の好意によって田口の会社に入れてもらい、1人「世捨て人」のような生活を送っていたが……。

### 再びあのまちへ……

事件から3年後、片山が電車内の吊り広告で目にしたのは、「衝撃スクープ!! 凶悪少年犯が仮退院していた」という週刊誌の記事。片山が警察、弁護士、保護司などからやっと集めることができた断片的な情報によれば、神木は1年8カ月で少年院を仮退院しているらしいということ。しかし、今神木はどこで、何をしているのか？

片山はそれを知り、神木と向かい合う中で、神木が本当に更生しているのかどうかを自分の目で確かめたいと思ったのだが、あらゆる法制度は神木との直接対

面を拒むものばかりで、神木の居場所さえ全くわからないまま……。しかし、保護観察官の滝沢真弓（佐藤藍子）を問い詰める中、きっと神木はあのまちに戻っていると直感した片山は、田口の最後の協力を得て、再びあのまちへ……。さて、片山はそこで一体ナニをしようとしているのだろうか……？

## 三池作品らしい豪華な共演陣に注目！

この『太陽の傷』は大阪ではホクテンザ1館の上映だが、三池崇史+哀川翔のタッグは8作目となるゴールデンコンビであるうえ、中盤以降は豪華な共演者が次々と登場する。まず1人目は、片山の妹の香緒里を演ずる癒し系の美女吉岡美穂。彼女は小学校の教師をしている明るい女性だったが、その目の前で兄嫁の飛び降り自殺を目撃する羽目に……。しかし3年後の今、何と彼女はこの事件を捜査した警察官の新田誠（本宮泰風）といい仲になっている様子で、これには片山も驚いたが……。

2人目は神木の弁護を担当した赤津弁護士を演ずる宅麻伸で、まさに「少年法サマサマ」を地で行く何とも嫌味な弁護士。神木の現状を探ろうとする片山に対して、赤津は「これ以上神木の後をつけ回すと犯罪になるぞ」と露骨な警告を……。

## キーウーマンは美人保護観察官

3人目は法務省のエリート保護観察官滝沢真弓を演ずる佐藤藍子。こんな美人でやさしい保護観察官がついたら、多少のワルでもしっかり更生しそうなものだが、なかなかそうはいかないのが現実……。ストーリー展開上、この真弓がキーウーマンとなるから要注目！

少年の更生のため保護観察官をしている真弓が、少年の所在を片山に教えることができないのは職務上当然のこと。まして、いくら片山から頼まれても直接面会させることなど許されないのは当然。

ところが、新米(?)保護観察官の真弓は、住所こそ教えなかったものの、片山の追及の前にそれとなく感づくような発言をしてしまったうえ、「遠くから神木が更生している姿を確認すればいいだけだから」という片山の言葉を轻信して、

神木が働いている町工場の前まで片山を案内してしまった。しばらくは車の中から神木の姿を見ていた片山だったが、突然車を降り、「約束が違います！ ひどいじゃないですか！」と抗議する真弓を振り切って工場の中へ乗り込んでいったから大騒動に……。

神木はすぐ奥の部屋に逃げていき、片山はオーナーの内村洋平（風間トオル）や従業員たちに押し止められたが、この一件によって真弓は保護司の福島太郎（平泉成）から大目玉を食らうことに……。これによってさらに神木や片山に対する責任感が増したのか、その後も真弓は神木と片山との「対決」の中に準当事者的な役割で入り込んでいくことに……。

その結果、最終的には神木から拳銃を突きつけられながら片山をおびき出すためのおとり役をさせられるという大変な目に……。

もっとも、新米保護観察官ながら、これだけさまざまな体験ができれば、大いに血となり肉となったはず……？

## やっぱり神木は……？

「少年法」に守られ、弁護士やボランティアの保護司そして法務省の保護観察官らに守られながら、更生の道を歩んでいるはずの神木だったが、実は神木は不良少年たちの間で伝説の存在となっていた……。

そんな神木に憧れる不良少年グループの紅一点がレイナ（夏山千景）。レイナは神木から譲り受けたナイフを宝物のように大切にしていたが、その第1の犠牲となったのがドラッグストア店員（遠藤憲一）であり、第2の犠牲となりかけたのが真弓。

次第に深く片山による神木探しの中に首を突っ込んでいくことになった真弓は、ある時レイナから「おばさん、ケガしたくなかったらお金置いて行って！」とナイフを突きつけられる羽目に……。

さらに、不良少年グループ最年少の13歳の涼（富浦智嗣）たちは、「14歳以下は殺しのライセンスを持っている」という言葉に乗り、神木がネットのルートで手に入れたホンモノの拳銃を手にして大はしゃぎ……。ケイタイに入ってくる神木からの指示を受けて、まず最初に今は更生しているかつての神木の仲間を血祭

りにあげることに。そして、その次のターゲットはしっかりと片山に向けられていた……。

やっぱり神木の更生は真っ赤なウソ！ そんな神木と神木に操られた少年たちに唯一人立ち向かう片山だったが、その行く手は……？

## 銃撃戦の果てに待つのは……？

レイナから拳銃を取りあげた片山は、それを持って神木から呼び出された場所に赴いた。その呼び出し役となったのは神木に拘束された真弓だったが、片山はたとえどんな危険な場所であっても喜んでそこに出向いて行ったはず……。もっとも、何の策もなく現場に行ったのでは敵の思うツボだと、私などは片山の無策ぶりにイライラさせられるのだが、映画は、そんな主人公であっても撃たれて死亡することはありえないという前提……。したがって、観客をいかにハラハラドキドキさせ、緊張感を持続させながら、片山と神木の直接対決まで持ち込むかが三池監督の腕の見せどころ……。

この映画もここまできると、普通の善良なサラリーマンという役柄に徹していた哀川翔が、次第に飢えた狼のような本来のキャラ(?)に戻ってきた様子……。派手な銃撃戦の後、真弓を盾にした神木が登場し、遂に神木と片山は拳銃を手に向かい合ったが……。

その後の顛末は是非スクリーン上で観ていただきたいもの。三池監督らしいラストは少しあっけない感じが残るものの、ちょっと異色……？

2006（平成18）年10月23日記